

6歳と76歳の創造性の比較研究

A Comparative Study of Creativity between 6-year-olds and 76-year-olds

高岸悟

Satoru Takagishi

放送大学

The Open University of Japan

takagisi.satoru@gmail.com

概要

本研究の目的は、6歳と76歳の創造性の特徴を比較検討したうえで、両者の協働活動で創造性がどのように変化するかを探ることである。幼児や高齢者の創造性を扱った論文はみられるものの、両者の協働活動で創造性がどのように変化するかをテーマにした論文は、管見の限りみあたらない。本研究では、6歳児と76歳の創造性を測定するために、新たな幼児用の描画テストを創り、さらに新たな指標として「奇抜性」と「魅力性」の2軸を採用した。その結果、協働 > 6歳・76歳、という傾向がみられた。

キーワード：幼児、高齢者、創造性、協働、創造性テスト、奇抜性、魅力性

1. はじめに

創造性について、マズローは、創造性を「特別な才能の創造性」と「誰でももっている自己実現の創造性」に分類している。また、ギルフォードは思考を、「集中的思考（主として知能）」と「分散的思考（創造性と関連）」に分けており、恩田彰（1966）は、「創造的思考＝直観的思考＋分析的思考」とのべている。近年の研究では、「創造的」であることを、「新しさ(new)」という観点と「有用性(useful)」の2軸で捉える見方が主流となっている（山口洋介, 2019）。

幼児の創造性について、飯田裕子（1974）は「幼児の思考過程は創造過程と類似しており、幼児期の創造性は発達とともに成熟した創造性につながる可能性がある」と述べ、田辺敏明（1983）は「幼児の創造性には母親の役割が大きく影響している」としている。また、大野雄子（2018）は「創造性を育むためには、自分の作品を自分で観察し、新たに得た知見をつなげて思考を広げていくことが大切である」と述べている。

幼児の創造性テストに関して、白石恵里・犬童昭久・王子直子ほか(2021)は、トランス（1915-2003）に着目し

ている。

高齢者の創造性について、水上喜美子らの研究（2011）では、「ボランティアや趣味などの能動的活動は創造的能力の維持に寄与する」、また、「Cognitive Control As a Double-Edged Sword」2016では、「認知制御の緩さによる創造性の向上の傾向がみられた」という。

本研究の着想は、「老化による認知制御の緩さは、発達途上の幼児にも共通する。もし両者が協働したら、創造性はどうなるのか？」という問いに基づいている。

幼児や高齢者の創造性を扱った論文はみられるが、協働活動で創造性がどのように変化するかをテーマにした論文は、管見の限りみあたらない。

表1 創造性に関する幼児と高齢者の相違点

観点	幼児	高齢者
認知機能	発達途上で緩い	衰えにより緩い
創造性	全員が所持	個人差が大きい
興味・集中	興味を持つと高い集中力	興味にかかわらず一定の集中力
失敗	多くが挑戦的	多くが非挑戦的
経験	非常に少ない	非常に多い

（「Cognitive Control As a Double-Edged Sword」2016など）

2. 研究目的

本研究の目的は、6歳と76歳の創造性の特徴を比較検討したうえで、両者の協働活動で創造性がどのように変化するかを探ることである。

また、実験1では協働が持続しなかったため、継続のための配慮を検討する。

3. 研究方法

本研究での対象の6歳児（女兒・6歳3ヶ月・正常発達・幼稚園5歳児クラスに在籍）と76歳（男性・後期高齢者）は、実験1から実験3まで同一被験者である。

創造性描画テストは、トーランスの幼児用創造性テストを参考に、幼児の創造性につながる本人の興味を引き出しやすい材料を工夫した。

また第三者による作品の評価では、創造性の評価指標として「奇抜性」と「魅力性」の2軸を採用した。

3.1 実験

3日間に分けて休日の午後30分程度、静かなダイニングキッチンテーブルをはさみ、二人だけで行った。

実験1. トイレットペーパーの芯で覗く創造世界

実験器具：トイレットペーパーの芯、ボールペン、円形用紙2枚。

方法：トイレットペーパーの芯で身の周りを覗いておもしろいものを見つけたらボールペンで円形用紙にその絵を描く。次に、もう1枚の用紙に先ほどの絵をもとにして、さらにおもしろい絵を描く。

結果：6歳はポケットモンスターボールの模様、76歳は目を描いた。次に、2枚目の用紙では、76歳は目の瞳の中に人の顔を描いたが、6歳は「できない」と言って、何も描かなかった。

協働では76歳が口を開け、6歳が口の中をトイレットペーパーの芯でのぞき、その絵を描いた。次に、76歳が舌を滑り台のような形にしてのど仏を見せたところ、6歳は「もうやりたくない」と言ったので、ここで実験は終了。

《考察》

・6歳にとって、トイレットペーパーの芯をのぞき周りを見回すことに興味を持ち、部屋中を歩いていたが、ひとつ選ぶことがむずかしかった。それを少し急がせてしまったことが、失敗の一因でもある。

・もっとおもしろくという要求は、6歳には難問であった。モンスターボールの絵から新たなイメージはわからないようだった。

・6歳にとって、人の口の中は見慣れていない場所のため気味が悪かったようだ。

・6歳と76歳では興味・関心に大きな違いがあることを忘れてはいけない。

・実験者が問題づくりに被験者の特徴を忘れて力を入れ過ぎてしまった。

実験2. 図形1 (図1参照) からの創造

実験器具：ボールペン、図形1が描かれた用紙

方法：用紙とボールペンを渡して、これを使っておもしろい絵を描いてもらう。

結果：6歳は描けないといていたが、76歳がVの字を昆虫の顔に見立てるのを見ると、すぐにペンを走らせ動物

(猫)を描いた。76歳はアリを完成。

協働では、まず、76歳が用紙を手に持ち、6歳にも見えるように、近づけたり、遠ざけたり、上から見たり、下からみたり、斜めからみたり、回転させたりしながら、「何に見えるかな?」と言っていると、6歳は「私がやる」と言い、同じことをやり始めた。しばらくして、76歳が「おじさんに見えない?」と言うと、6歳はペンを持ち、一気にお餅つきの絵を完成させた。

下図は左から順に、図形1・76歳・6歳・協働である。

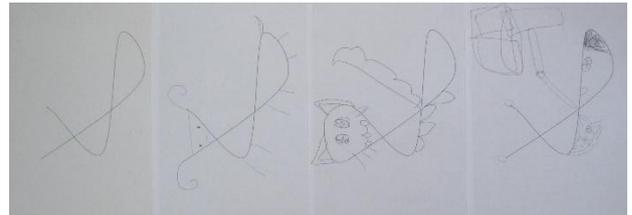


図1 実験2の結果

《考察》

・6歳にとっては、見慣れない図を見て何かを連想するのは難しいのだろうか。正面で76歳がV字の中央あたりに横線を引いて逆三角形に目を入れているのを見て、6歳はV字の上上半円を描き始めるやすぐに絵を完成した。

・6歳は、問題の図から直感的なイメージが頭に浮かぶとすぐにペンを走らせた。それに対して、76歳は、全体や部分を言葉に置き換えてからイメージを浮かべ描いた。(初期イメージの違い)

・とにかく、6歳の興味・関心を考えて問題をつくること。

実験3. 図形2 (図2参照) からの創造

実験器具：ボールペン、前回の反省を踏まえ、6歳が興味を持ちそうな問題の図を3枚用意

方法：6歳に問題の選択をさせてから、絵を完成させる。

結果：図形2を選ぶと、6歳はペンを走らせ、いっしょに、うさぎを描いた。76歳はじゃんけんのチョコキを描いた。

協働では、実験2同様、6歳が用紙を動かしているときに76歳がひらめき、隣の部屋の人形ケースからこけしを持ってきたことから生まれた。

下図は左から順に、図形2・76歳・6歳・協働である。

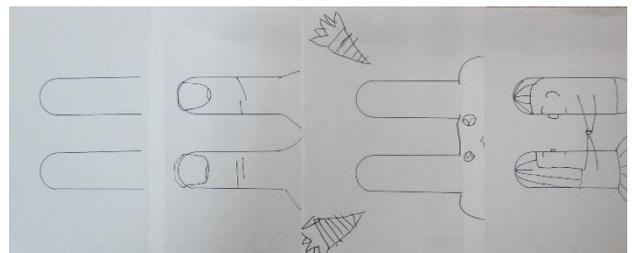


図2 実験3の結果

《考察》

- ・6歳の興味と自主性を考慮して問題をつくったことで創造を活発にすることができた。
- ・創造性には興味と自主性が必要である。
- ・「こけし」の実物の影響が大きい。
- ・実験終了後、6歳は、「問題をつくりたい」と言うので、用紙を渡すと、中央左上に五角形を書いて、「いままで星型がなかったから」と言った。これは問題作成、まさに、創造的思考である。

3.2 アンケート

3種類の作品（6歳単独、76歳単独、協働）を大学のゼミの時間中に、13名の評定者（24歳から70歳、平均51.8歳、男性5名、女性8名）に提示し、「奇抜性」と「魅力性」の観点から順位付けを依頼した。実施は2025年1月、所要時間は5～10分間程度であった。ただし、実験1は中断されたためにアンケート内容から除外した。

3.3 集計結果

統計分析は、同一人物が三作品の順位をつけたため、フリードマン検定を実施した。ただし、実験1は除外。

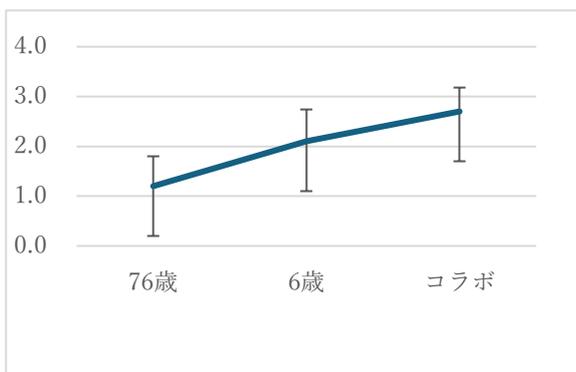
3.3.1 実験2「奇抜性」

フリードマン検定

検定統計量: 14.0

有意差あり（1%以内）

奇抜性	76歳	6歳	コラボ
平均	1.2	2.1	2.7
SD	0.60	0.64	0.48



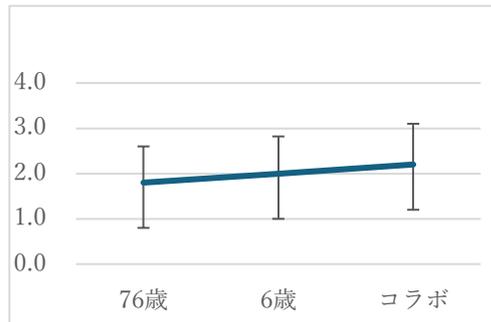
3.3.2 実験2「魅力性」

フリードマン検定

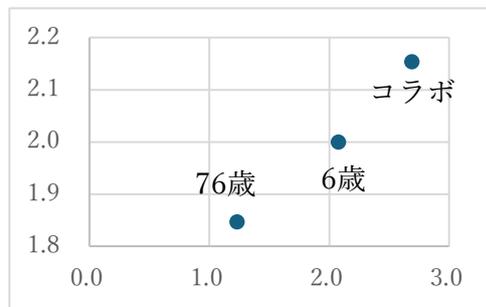
検定統計量: 0.615

有意差なし

魅力性	76歳	6歳	コラボ
平均	1.8	2.0	2.2
SD	0.80	0.82	0.90



3.3.3 実験2「奇抜性（横軸）と魅力性（縦軸）」



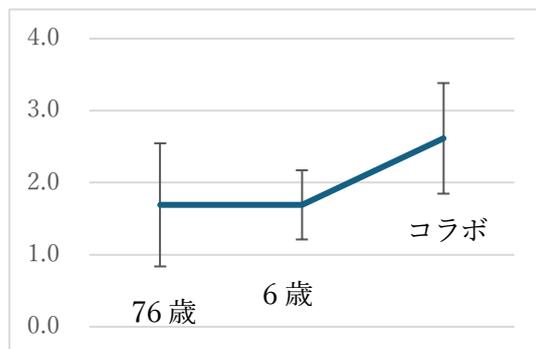
3.3.4 実験3「奇抜性」

フリードマン検定

検定統計量: 7.385

有意差あり（5%以内）

奇抜性	76歳	6歳	コラボ
平均	1.7	1.7	2.6
SD	0.85	0.48	0.77



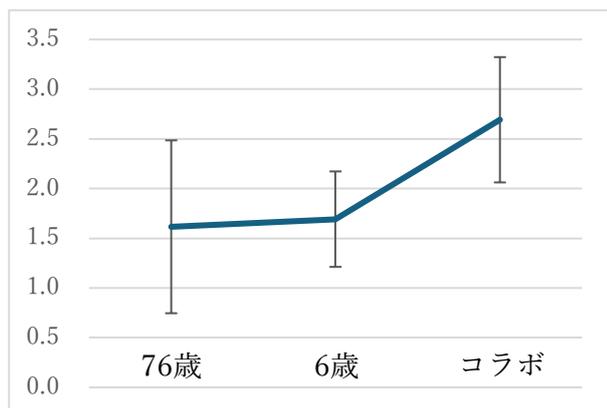
3.3.5 実験3「魅力性」

フリードマン検定

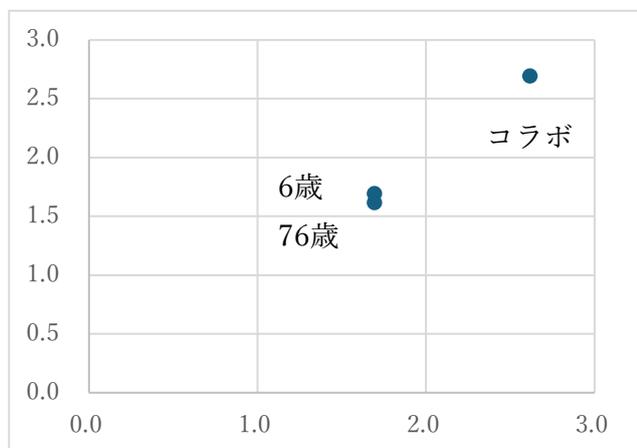
検定の統計量: 7.538

有意差あり (5%以内)

魅力性	76歳	6歳	コラボ
平均	1.6	1.7	2.7
SD	0.87	0.48	0.63



3.3.6 実験3「奇抜性 (横軸) と魅力性 (縦軸)」



4. 総合考察と今後の課題

実験1①, 実験2②, 実験3③における変化

・6歳児 ①トイレットペーパーの芯をのぞく探索に熱中したが、描画から次の創造は出来なかった。②模倣することで集中できた。③3つの問題から1つを選択することでやる気になった。

・76歳 ①おもしろさを発見し、作品につながった。

②図から連想できる単語の中から選択。③ことばでなくじっと見つめたときのイメージ。

・協働 ①「舌のすべり台を喉仏がすべる」という76歳のアイデアを6歳が理解できずに失敗。②問題を手に取り多面的に見ていた76歳を6歳が真似をしているときの会話がきっかけで描き始めた。③具体的なこけし

を見つけ、話し合っ作品になった。

アンケート統計

・本研究における作品評価の客観性を担保する標準化作業はまったく行われていない。

・少数の実験, 少数の被験者, 少数のアンケートではあったが, 協働は効果的という傾向はみられる。

今後の課題

・描画以外の物語, 作詞作曲, 工作, 料理に広げる。

・幼児と高齢者の組み合わせを増やす。

・アンケート数を増やし, 男女や年齢層や文化の違いがみられるようにする。

・幼児と高齢者の創造力を高める方法を模索する。

・そのためには, 幼児と高齢者以外の共同場面における創造性を扱った研究を調べる。

謝辞

一緒に実験をしてくれた6歳の孫娘へありがとう。実験の許可と孫娘の情報を与えてくれたパパとママ, ありがとうございます。

そして, 放送大学千葉学習センターの金子先生とゼミのみなさま, 実験・アンケート・アドバイスなど惜しみないご協力, 本当にありがとうございました。

最後に, 研究中支えてくれた妻に感謝します。

文献

「Cognitive Control As a Double-Edged Sword」2016 (『Trends in Cognitive Sciences』) ハーバード大学などの研究チームの文献レビュー

田淵恵他「高齢者の Generativity 尺度における「創造性」の位置づけ」2010 日本心理学会第74回大会

水上喜美子他「高齢者の創造性 (領域と特性) に関する検討」2011 日本心理学会第75回大会

山口 洋介・三宮 真智子「成果に基づく創造性の定義に関する理論的考察」2019 日心第83回大会

大野雄子「創造性を育む保育者の役割」2018 千葉敬愛短期大学紀要40号

中村吉秀「幼児の『表現』に関する基礎的考察」2021 北海道教育大学函館校

白石恵里, 犬童昭久, 他「トランスの創造性テストの再考と試行II 幼児期 (5~6歳児) における調査と分析」2021 和歌山大学教育学部紀要, 教育科学71 35-43

恩田彰「幼児の創造性について」1966 幼児の教育, 巻65号 2, P. 6-11, 日本幼稚園協会

飯田裕子「幼児の創造性に関する基礎的研究」1974 14, 63-69, 東京家政大学紀要

田辺敏明「幼児の創造性に関する文献的研究」1983 高松短期大学『研究紀要』第13号